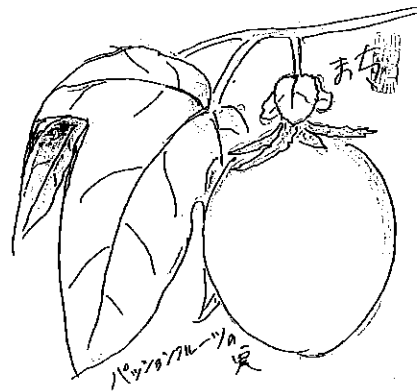


心を見つめる

7月1日からの1週間、本校の「心を見つめる教育週間」でした。この教育週間は今から18年前、長崎において中学1年生が4歳の幼児を殺害した事件を契機に県内各小中高校で取り組まれるようになりました。その初日に校長が、“命の講話”を行うようになっていきます。私も1日の朝に全校集会を開き、話をしました。いつも感心することですが、開始時間より早く集合し、真剣に話を聞いてくれました。その講話の概略を紹介します。



今日7月1日は18年前に長崎市で中学生幼児殺害事件が起こった日です。また、1年の折り返しの日でもあります。昨年は、各教室で道徳の時間を使って“寿命”の話をしました。今、日本人の平均寿命はおよそ男性81歳、女性は87歳です。ちなみに100年前は男性42歳、女性は43歳でした。私は59歳ですから、100年前ならとっくに死んでいます。今も既に“寿命の折り返し”を過ぎています。さて、“命”といえは、やはり“生”と“死”が連想されます。

若いときは、どちらかという“生”に目が向いていました。自分の子どもの誕生や成長を見ることで、“生きる”ことの素晴らしさを実感していました。子どもが生まれて最初にするのは何か知っていますか。それは肺呼吸です。産声をあげることで肺胞が膨らみ、呼吸を始めます。次に初乳を飲みます。いずれも本能で行います。つまり、“生きよう”とするのです。そこから成長が始まります。成長の過程で自ら“生きる力”をつけていくのです。

しかし、歳を重ねるにつれ、家族の“死”を通して“生”を考えることが多くなりました。昨年9月に姉を、今年3月に母を亡くしました。長い期間、ガンの闘病を続ける姉を見ながら、また、認知症と歩行不能のため、老人ホームで変化のない毎日続ける母を見ながら、「このまま生きていくことが幸せなんだろうか」と思い、亡くなったときはとても悲しかったけど、「苦しみから解放されてよかった。」とさえ思いました。しかし、今は心に大きな穴が開いた気分です。そして、「自分は母や姉の存在に支えられていたんだなあ」と痛感しています。離れて暮らしていたので、今でも生きているような、会いに行けば喜んでくれるような、そんな気がしています。で、今思うのは、「やっぱり生きていてほしかった」ということです。

ところで、“心を見つめる”とはどういうことでしょうか。私は“自分を見つめなおす”と解釈しています。今、あなたたちは成長のときです。できなかったことが、どんどんできるようになる。頑張れば頑張るほどできることが増えていく。勉強もそう、運動や文化活動もそう、人を思いやる心もそうです。結局、自分次第です。どう考えどう行動するかです。私達は生きるために産まれました。そして、多くの人に支えられながら生きています。

最後に質問。「あなたは誰のために生きていますか？何のために生きていますか？」まずは自問自答してください。そして、今の自分を見つめなおして欲しいと思っています。

この1週間、“生きる”について深く考え、自分を見つめなおすことができたでしょうか。終わりに、生徒会の黒板に書いてあった一文を紹介します。

選んだ道が『正解』となるように 努力するだけ